

カ従属節はどのような表現か

丸谷　しのぶ

要旨

カ従属節（句末に助詞「か」をもつ従属節）を含む文は、どのような性格を持つのだろうか。本稿ではカ従属節が文中のどのような成分として使われるかを整理し、主節と関係を構成するカ従属節（本稿で言うA類）を対象に、その基本的性格を考察した。その結果、カ従属節A類は「主体の判断領域（モダリティ領域）」に関わる表現であり、主節に対するカ従属節の独立文的な性格が強くなると「主体の表現効果意識の領域」にも関わるようになる、という結論を得た。

キーワード カ従属節、モダリティ領域、判断、独立文的、表現効果意識

1. はじめに

日本語学習者が句末に助詞「か」をもつ従属節（以下、カ従属節と呼ぶ）を含む文の用法を学習する際、次の様な点が学習のポイントとして挙げられる。

不確かなことを相手に尋ねる表現として、通常の疑問文ではなくカ従属節を含む疑問文が使われるのはどのような場合か。

(1)a. 授業が何時に終わるか、わかりますか。 *¹

b. 授業は何時に終わりますか。

文全体としては不確かさを表わしていないのに、カ従属節が使われるのはなぜか。この時、カ従属節は何を表わしているのか。

(2)a. 授業が何時に終わるか、時間割りを見て調べました。

b. 授業が何時に終わるか、学生ならだれでも知っています。

日本語教師としてこうした点について適切な説明を行うためには、カ従属節がどのような表現なのかを整理しておく必要がある。そのための基礎作業を行うのが、本稿の目的である。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節では、カ従属節が文中のどのような成分として使われるかを整理し、カ従属節の形態上の分類を行う。その分類に従って3節では、カ従属節が文中でどのような役割を果たしているかを分析し、カ従属節の基本的性格を考察する。4節は、まとめである。

* 1 本稿の用例は、出典の記載がない場合は筆者の作例である。出典を示す場合は、用例末の（ ）内に略称で記載する。

2. カ従属節の形態

本節では、カ従属節が文中のどのような成分として使われるかを整理し、本稿の考察対象（A類）を確定する。

2-1. カ従属節の分類

カ従属節は普通、真偽疑問文が節化したか疑問語疑問文が節化したか^{*2}によって、句末の形式が異なる。

(3) ・あした田中さんがここへ来るかどうか、知っていますか。

・あしただれがここへ来るか、知っていますか。

疑問語疑問文が節化した場合は、「～かどうか」の形は通常、使われない。

(4) *あしただれがここへ来るかどうか、知っていますか。

カ従属節が文中成分になる文の種類としては、動詞文、判定詞文、形容詞文、比較表現の文、例示表現の文など、様々なものが観察される。また、カ従属節は挿入句的に使用されることもある。このように、文の成分として多様な使われ方が観察されるカ従属節について、次のような分類を提案したい。

[カ従属節の分類]

A類：主節の述部と関係を構成するもの

1 種：文中の成分となっているもの

- a. 主節述部の格成分として使われる場合
- b. 名詞を修飾する成分として使われる場合
- c. 例示表現の成分として使われる場合
- d. 条件節の成分として使われる場合
- e. 引用節内の成分として使われる場合

2 種：主節に対し、独立文的なもの

3 種：文とほぼ同等のもの

B類：主節の述部と関係を構成しないもの

まず、カ従属節が「主節の述部と関係を構成するかどうか」^{*3}という観点から、カ従属節をA類、B類に分ける。次にA類について、主節に対するカ従属節の独立度によって3種に分け、独立度の低い方から1種、2種、3種とする。更に、A類1種について、カ従属節が文中のどのような成分になるかによって、a～eに分類する。

本稿では、このうちA類を考察の対象として扱っていく。^{*4}

* 2 益岡・田程（1992）p.184「疑問表現の補足節」

* 3 この表現は藤田（1983）による。

* 4 B類については服部（1992）、安達（1995）に論考がある。

2-2. カ従属節A類の形態上の特徴

本節では、本稿の考察対象であるカ従属節A類について、形態上の特徴をまとめるとともに、前掲「カ従属節の分類」の分類方法についても触れていく。

2-2-1. A類1種a

このグループは、カ従属節が主節述部の格成分として使われるものである。基本的に「カ従属節＋格助詞」の形式を取り、ガ格、ヲ格では助詞のない形も可能である。このグループは、以下のような構文で使われる。

①カ従属節の主節述部が動詞の場合

(5) ・あしただれがここへ {来るか／来るかを} *⁵聞きましたか。

・どんな料理を作るかで買うものが決まる。

・一クラスの人数は、何をどうやって教えるかに関係がある。

②カ従属節が判定詞文「Pが(は)＋Qだ」の成分P、Qとして使われる場合

(6) ・この授業で学生に何を教えるかが問題だ。

・問題は、この授業で学生に何を教えるかだ。

③カ従属節が形容詞文の成分として使われる場合

(7) 私にとって、料理は手早くできるか保存が利くかが重要でしたが～(朝日)

(8) いつごろ桜が見ごろになるか、情報がほしい。

(9) 試験に合格したかどうか、早く知りたい。

用例(8)(9)のような場合、カ従属節を独立した文とほぼ同等のもの(A類3種)として解釈することも可能であるように思われる。また、用例(8)のような場合、「の」「という」によって、カ従属節が名詞節内の修飾成分(A類1種b)となることも可能である。

(10) いつごろ桜が見ごろになるか {の／という} 情報がほしい。

④比較表現としての形容詞文の成分として使われる場合

(11) ・何を教えるかよりどう教えるかの方が {重要だ／おもしろい}。

・何を教えるかはどう教えるかと同じぐらい {重要だ／おもしろい}。

・何を教えるかどう教えるかではどちらの方が {重要か／おもしろいか}。

2-2-2. A類1種b

このグループは、カ従属節が名詞節内の修飾成分として使われるものである。基本的に「カ従属節＋の／という＋名詞N＋助詞」の形式を取り、以下のように使われる。

* 5 「／」は、／で区切られた表現がいずれも使用できることを示す。

①名詞Nが形式名詞ではない場合

(12)・どちらを優先させるかという問題は常にありますね。(舛添)

・われわれの新しい市場をいかに掘り起こすかという視点で市場の開拓を行い～(舛添)

・はたして資金供給国として、どこまでの責任を負うかという範囲の問題があるでしょうね。(舛添)

(13)・松田聖子をどう撮って、どう見せるかの手だてがいっぱい出てきてたわけ？
(河童)

(13)のように「カ従属節＋の＋名詞 N ＋助詞」という形の場合、「の」を「という」に置き換えられるものもある。しかし「の」と「という」は、必ずしも相互に置換可能というわけではない。また、カ従属節と名詞をつなぐ「の／という」を省略した形が可能な場合もあり、「の／という」を省略するとカ従属節が独立文的に解釈されるように思われる。

(14)・はたして資金供給国として、どこまでの責任を負うか【の／という】範囲の問題があるでしょうね。(舛添)

・松田聖子をどう撮って、どう見せるか【の】手だてがいっぱい出てきてたわけ？

②名詞Nが形式名詞の場合

(15)・あしただれがここへ来るかということを知っていますか。

・この授業で学生に何を教えるかということが問題だ。

・いつごろ桜が見ごろになるかということを知りたい。

・何を教えるかということよりどう教えるかということの方が重要だ。

・短い二、三言の会話。あれで、どういう役柄で、何をしようとしている人間かというのが、よく出ていて～(河童)

(16) 私自身もたくさんの女性議員の方たちと議論をしますが、こんなものだったのかということがあるじゃないですか？(舛添)

名詞 N が形式名詞の場合、「という＋こと／の」を除いてA類1種aの形式にすることが概ね可能なようであるが、用例(16)のように「という＋こと／の」を除くことができないものもある。

2-2-3. A類1種c

このグループは、カ従属節が例示表現の成分として使われるものである。A類1種cには、A類1種a、bに分類し得るものもあるが、そうでないものもあるため、ひとまず例示表現として整理することにした。A類1種cのカ従属節は基本的に、「カ従属節＋という／の＋ような／ように」、「カ従属節＋例示の並列表現に使う助詞、副詞等」の形式をとり、以下のように使われる。

①「カ従属節＋という／の＋ような／ように」

- (17) PKOだったら、連合と社会党とおたくは同じじゃないか、というような形で票を減らすことになりませんか？（舛添）
- (18) ニューヨークという街の生身を、まるごと運んできたかのような臨場感で見せてくれたから。（河童）
- (19) 子供や家族のためには仕事をやめて家にいるべきではないかというように考えたこともありました。

②「カ従属節＋例示の並列表現に使う助詞、副詞等」

- (20) フランスのブローデルという歴史学者の書いたヨーロッパ史を見ると、…人びとが何を食ってたとか、じゃが芋はどう広がったかとかがね、しっかり書いてあるんです。（河童）
- (21) 具体的に、筒井さんは政界再編成といったときにどういう姿を思い浮かべますか？つまり、自民党が二つに割れて、社会党が二つに割れて成るのか、あるいは自公民なのかいろいろあると思いますけど～（舛添）

2-2-4. A類1種d

このグループは、カ従属節が条件節内の成分として使われるものである。基本的に「カ従属節＋という／といえど」の形式をとり、以下のように使われる。

- (22) ・自民党として三年前をなぜいい出したかという、政治改革大綱を作るときに、党内ずいぶん熾烈な議論をしたわけです。（舛添）
- ・過去の社会党の大きな欠陥といえど、社会主義の立場に立っていたということ、日本の政治の大きな欠陥が何かといえど政権交代がないことだと思います。（舛添）

2-2-5. A類1種e

このグループは、カ従属節が引用節内の成分として使われるものである。基本的に「カ従属節＋＋動詞」の形式をとり、動詞には思考動詞、感情動詞、感覚動詞、コミュニケーション動詞等が使われる。また、カ従属節末には、「～のか」「～ではないか」「～のだろうか」等の表現が頻繁に観察される。

- (23) ・特に国語っていうのは、試験の問題の正解を聞いても、全然納得できなかったのね。どうしてこんな馬鹿げた学科があるのかと、ずっと思った。（河童）
- ・あの時、タチの良くない悪戯をする奴だなと思ったのではないかと、心配になったんだ。（河童）
- ・人間が遺伝子をコントロールすることが果たして許されるのだろうか、と考えさせられた。

- ・あの会社もそろそろ危ないのではないかとと言われて既に1年が過ぎた。

2-2-6. A類2種

このグループに分類されるカ従属節はA類1種より独立度が高いと認められるものである。A類2種は、主節述部との関係性は認められるものの、主節に対して「独立文的」である。「独立文的」というのは、カ従属節の後の指示詞によってカ従属節と主節との連鎖が切られており、カ従属節の後に句点を打つこともできることから、カ従属節を文と認定することも可能である、ということである*⁶。基本的には「カ従属節+指示詞（+名詞）+助詞」の形式をとり、以下のように使われる。

- (24) ・だれも見たこともない、初めて体験するようなカーチェイスを作り上げてみせるぞと、思うか思わないか。これがやっぱり、勝負の別れ目なんでしょうね。

(舛添)

- ・俺はギリシア悲劇になぜコロスが必要なのか、その本当の意味を探りながらやりたい。(河童)

この基本形の他に、A類2種の中にはA類1種a～dとの関連性が伺えるパターンが観察される。*⁷

2-2-7. A類3種

このグループに分類されるカ従属節A類3種は、A類の中で一番独立度が高く、それだ

* 6 野田(1989)のいう「真正モダリティを持たない文」に相当すると思われる。

* 7 A類2種とA類1種a～dの関連性を伺わせるものとして、次のようなパターンが観察された。

- ・A類1種aとの関係：A類2種の基本形「カ従属節+指示詞名詞修飾形態（この、その）+名詞+助詞」から「指示詞名詞修飾形態+名詞」を除くと、A類1種aとなる。

例 俺はギリシア悲劇になぜコロスが必要なのか〔、その本当の意味〕を探りながらやりたい。
(河童)

- ・A類1種bとの関係：A類2種が「カ従属節+と。+指示詞述語修飾形態（こう、そう）ということ」というバリエーションで使われた場合、指示詞を除くと、A類1種bになる。

例 どちらを優先させるかと〔。そう〕という問題は常にありますね。

また、「カ従属節+と。+指示詞名詞修飾形態（この、その）+名詞+助詞」という形で使われた場合、指示詞を「いう」に置き換えるとA類1種bになる。

例 どちらを優先させるかと〔。その→いう〕問題は常にありますね。

- ・A類1種cとの関係：A類2種が「カ従属節+と。+指示詞名詞修飾形態（この、その）+ように／ような」というバリエーションで使われた場合、指示詞を「いう」に置き換えると、A類1種cになる。

例 連合と社会党とおたくは同じじゃないかと〔。その→いう〕ような形で票を減らすことになりませんか？

- ・A類1種dとの関係：A類2種が「カ従属節+指示詞述語修飾形態（こう、そう）いうと／いえば」の形で使われた場合、指示詞を「と」に置き換えるとA類1種dになる。

例 どちらを優先させるか〔。そう→と〕問われれば～

けで独立した文と見なすこともできるが、カ従属節につながる表現や使用場面等からカ従属節に対応する主節述語が想定できるため、カ従属節が主節の述部と関係を構成していると判断し、A類としたものである。基本的に「カ従属節。」の形式をとる。いくつか例を挙げる。

- (25) 「地球食材の旅」に（取材者として）参加しなければ、一生パスした食品売り場ではなかったか。（朝日）

これは、カ従属節のあとに省略記号「ー」が付されており、省略された部分に主節述部として、例えば「と考えている。」というような表現が想定できる。

- (26) 日本の食生活は豊かか？（朝日）

これは新聞の見出しとして使用された例である。見出しとしての性格を考えると、この用例に対する主節述語として、例えば「日本の食生活は豊か（どうか）、見直してみよう」といったような、読者への呼びかけの表現を想定することができる。

- (27) その中で、はたして方向付けがどうなのか。例えば今、自公民対社共という形で分かれていますよね。（舛添）

これは対話場面での発言である。「～はたして方向付けがどうなのか」のあとに、例えば、「お聞きしたいと思います。」といった表現を主節述部として補うことができる。

- (28) 一回目のジャンプ、今、一人目のグループが飛んでいます。＜選手がスタートする＞*8 チェコのスハチェックが飛びます。＜滑走中＞19歳の若手ジャンパー。
＜踏切＞あっと、ちょっとバランス、崩したか。＜飛行中、着地＞大きくロスしてしまいました。（長野）

これは、スキージャンプ競技の実況での例である。「あっと、ちょっとバランス、崩したか。」のあとに、例えば「と見えました」というような表現を主節述語として補うことができる。

この基本形の他に、A類3種の中にはA類1種eとの関連性が伺えるものが観察される。その場合、「カ従属節＋と。」の形をとり、この後に動詞（A類1種eで使われる動詞）を補うことができる。

- (29) 私が政治学者として外から観察していますと、それではかえって票が取れないんじゃないかと。（舛添）

3. カ従属節の役割

本節では、カ従属節が文中でどのような役割を果たしているかを分析し、カ従属節の基本的性格を考察する。

*8 用例中の＜ ＞部分では、競技の流れ、場面の説明等、用例の使用状況に関する情報を示す。

3-1. A類1種aの場合

カ従属節A類1種aは、基本的にその時話題になっている事柄について、不明な点を述べる場合に使われる。^{*9}

(30)・(脳死を人の死と言っていると思う。)しかし、いまの判定基準では脳が本当に死んだかどうか確認しきれていない。(河童)

・あの偉大なドストエフスキーなんかでさえも、自分が書いた作品が傑作であるかどうか、常に自信がなかったらしい。(河童)

・(調理師になるつもりはなかったので)うーん、自分でもなぜこうなったか定かじゃないんです。(河童)

カ従属節の表わす不明点の内容がどのような概念領域に属しているのかを見ると、事態に対する判断、評価、理由付けなど、主体が事態をどう判断し、捉えているかという「主体の判断領域」(いわゆるモダリティ領域)に属する内容が観察される。^{*10}

次に、比較表現の中で使われている場合を見てみよう。

(31) 映画は、何を撮るかよりも、やっぱり、どう撮るかなんです。

比較表現の中で使われるカ従属節は、比較のポイントを表している。比較というのは、複数のものを比べて選んだり評価したりする判断の一種である。比較表現の中で使われたカ従属節の内容は、何が比較のポイントとなるかということに対する話者の見方を反映していると考えられる。このような意味で、比較表現の中で使われたカ従属節も、「主体の判断領域」に属する内容を表していると見ることができる。

ところで、用例(31)は次の用例(32)のような形にして、カ従属節を使わずに同等の内容を表すことが可能である。

(32) 映画は、内容よりも、やっぱり撮り方なんです。

このように、カ従属節を使わない形に置き換えられるA類1種aの例は、比較表現に限られたことではない。カ従属節を使ったものとそうでないものを比較すると、次のようなことに気づく。

・話し手の立場から考えると、カ従属節を使った表現は、考えたことを即座に言語化

*9 藤井(1983)、服部(1992)、安達(1995)

*10 益岡(1997) pp.82-84「従属節と文の概念レベル」で、「表現主体の判断に関わる表現」と定義された「判断レベルの従属節」という捉え方に相当すると思われる。益岡(1997)は従属節が表現する概念領域のレベルによって、次のような類型を提示している。

類型① 事態命名レベルの従属節：ある型の事態を総称的に指し示す表現

類型② 現象レベルの従属節：特定の時空間に実現する個別的な事態を指し示す表現

類型③ 判断レベルの従属節：表現主体の判断に関わる表現

類型④ 表現・伝達レベルの従属節：表現・伝達の機能を保持している表現

類型①、②は従属節が表わす概念領域が「対象領域のレベル(命題のレベル)」に属するもの、類型③、④は従属節が表わす概念領域が「主体領域のレベル(モダリティのレベル)」に属するものである。

する方法として、より使いやすい表現であるように思われる。

- ・聞き手としても、カ従属節を使った表現の方が、話し手の思考の流れを受け止めやすいのではないか。
- ・カ従属節を使った表現には、話題に対する話し手の熱意や思いといったものが感じられ、聞き手の側も共感を持ちやすいのではないか。

このように、カ従属節を使った表現には話し手と聞き手の間にスムーズな伝達経路を形成する、コミュニケーション上の効果があるように思われる。

さて、次に挙げる用例(33)は、上に述べてきたような、主体が事態をどう判断し捉えているかという「主体の判断領域」に属する内容には関わっていないように見える。

(33) もうちょっと問題を変えて、どういう問題が温暖化の問題なのか考えてみると～

このカ従属節を含む下線部分は、「温暖化問題の具体的な内容を考えてみる」と言い換えることができ、カ従属節の内容は、「温暖化問題の具体的な内容」という現象の領域に属する内容を表しているように見受けられる。しかし、このカ従属節を、これに続く部分を含めて談話の単位で考えてみると、このカ従属節の談話内での役割が主体の判断領域に関わるものであると捉えられることがわかってくる。具体的に見てみよう。

(33)' もうちょっと問題を変えて、どういう問題が温暖化の問題なのか考えてみると、今おっしゃったように、地球が暖かくなって水面がどんどん上がってくると言うことですが、これはもし地球上に国境というものがなかったら、人類にとつてどうかと考えると、それほど悪いことではないはずです。(舛添)

カ従属節に続いて、「地球が暖かくなって水面がどんどん上がってくる」という表現で温暖化問題の具体的な内容(＝住む土地が減ること)が示される。それに続いて、温暖化問題は自然環境の問題ではなく人類社会の問題であるという問題の本質に関わる内容が述べられる。つまり、カ従属節を使った問題設定の表現に導かれて、温暖化問題の本質が述べられているのである。

このようにカ従属節は、問題を掘り下げ、問題の本質を述べるための問題設定表現という役割を担っている。つまり、カ従属節が使用される背景には、何が問題なのかという話者の判断、捉え方があり、それを述べ始めるための表現としてカ従属節が使用されているのである。このような意味で、一見「主体の判断領域」には関わっていないように見えるカ従属節も、実は「主体の判断領域」に関わる表現として捉えられるべきであると考えられる。

以上のことから、A類1種aからみたカ従属節の性格は次のようにまとめられる。

(34) カ従属節の使用は、主体が事態の何をポイントと捉え、それをどう判断しているかという「主体の判断領域」に関わっている。

3-2. A類1種bの場合

カ従属節A類1種bは「カ従属節+という／の+名詞N」という基本形を持つグループである。これは、カ従属節の内容が名詞Nの範疇に属することを示す表現形式^{*11}である。本節では、この名詞Nの内容を手がかりに、カ従属節の内容を検討しその性格を考える。

名詞Nには、次の①～⑦のような内容のものが観察される。管見の範囲で、名詞Nの具体例を挙げる。|| は、同じグループ中での意味的な区別が認められるところを示す。

①話題の事柄の内容や概略

テーマ 内容 考え方 問題点 || 実験 インタビュー 論争 || 現象

②話題の事柄の特徴にかかわる点

共通点 相違点 (時期の) 違い

③話題の事柄に関する、何らかの限界点

ギリギリのところ 最初のところ

④懸案事項への疑問、提言

疑問 質問 疑問の声 問いかけ 問題点 提言

⑤懸案事項への対処

対処方法 手だて 偵察 政策

⑥懸案事項への見方

視点 考え方の枠組み 理論 || 批判 議論 意見 || 理由 意味合い || 判断 決定

⑦懸案事項に対する興味、感情、懸案事項から受ける感じ

関心事 興味 || 緊張感 不安 失望 妬み 恐怖 || 気 感じ

①～⑦の名詞の内容を見ると、話題となっている事態を特定するポイントに対する話し手の判断や受け止め方がカ従属節による表現内容の中心となっていることがわかる。A類1種bのカ従属節の使用も、前節A類1種a(34)にまとめたように、「主体の判断領域」に関わるものであると考えることができる。

特に、カ従属節を受ける名詞Nが形式名詞ではない場合には、カ従属節で示された内容を話し手がどのような範疇の問題として受け止めたかが明確に表現される。2-2-2 節に挙げた例から、見てみよう。

(12) どちらを優先させるかという問題は常にありますね。

この例では、「どちらを優先させるか」というカ従属節の内容が「問題」という範疇にある、という捉え方が示されている。このカ従属節の内容は、「選択、迷い、順位」など、他の言葉で受けることも可能であるが、ここでは「問題」という言葉が選ばれており、カ従属節の内容に対する話し手の捉え方が反映されていると考えられる。

* 1 1 益岡（1997）pp.25-46 「連体節の接続形式－内容節を中心に」

3-3. A類1種cの場合

カ従属節A類1種cは例示表現の成分として使われたものである。この場合、次の用例(35)に典型的に見られるように、不明な点や問題点について代表例や極端な例を示すことが多い。

(35)・(新党を結成すると)具体的に、PKO という政策のレベル、それから税制にしてもそうでしょうし、日米安全保障条約をどうするかとか、いろんな問題が出てくると思うんですよね。(舛添)

・七〇年代はまず素材づくりでしたね。それも自然の蘂をみて蘂から発想した素材ができないだろうとか、石からとか、雲からもできないだろうかというふうに、ゼロから発想してつくっていくマチエールというのが非常に重要だったわけです。(河童)

こうした代表例や極端な例が示されると、問題の範囲や構造が明確になる。従って、どういうポイントを例示したかというところに、話者が問題の範囲や構造をどう捉えているかという主体の判断が反映されていると見ることができる。このような意味で、カ従属節A類1種cも、「主体の判断領域」に関わるものと考えることができる。

3-4. A類1種dの場合

次に、カ従属節が条件節の成分として使われるA類1種dの場合を見てみよう。カ従属節A類1種dを含む条件節は、話を展開させるという役割を担っている。^{*12}この条件

*12 A類1種dを含む条件節による話の展開には、次の様なものが観察される。

・話を次の段階に進める：

例 ぼくが死んだら、みんなドッと集まってきて、ワイワイガヤガヤ何をやっているのかといえば「これはぼくの本だ」「これは私の」とかね。(河童)

・問題の焦点を絞る：

例 日本の政治の大きな欠陥が何かといえば政権交代がないことだと思います。(舛添)

・理由や意味付けを述べる：

例 今のわれわれみたいな人間というのがなぜ存在するのかといいますと、一万年位前に人類は農耕牧畜を始めたわけですよ。これはどういうことかという、地球を利用することで自ら繁栄する、豊かになるという道なんですよ。(舛添)

・カ従属節の内容を否定する：

例 見たものすべてを描き表わさなければ、その人物を描き出すことができないかという、そうでもない。(河童)

・カ従属節の形で挙げた選択肢から、どちらを選択するか述べる：

例 だから要は、比例代表を中心に考えるのか、小選挙区を中心に考えるのかといえば、私は小選挙区に比例代表を加味すると。(舛添)

・解決策を示す：

例 どうすればいいのかっていうとね、やっぱりアメリカ人というのは移民の国で、いろんな文化の人が混じり合って住んでいるから、下手に作るとだれにもわかんない映画になってしまうぞということが、発想の原点なんです。(舛添)

節の中でカ従属節自体は、話の展開のポイントとなる事柄を示している。つまり、A類1種dの内容は、それが話の展開のポイントであると判断した話者の捉え方が反映されていると考えられ、カ従属節A類1種dも、A類1種a、b、c同様、「主体の判断領域」に関わるものと見ることができる。

3-5. A類1種eの場合

このグループは、「カ従属節＋と＋思考／感情／感覚／コミュニケーションに関わる表現」の基本形を持つものである。カ従属節末の形式は、「～のか」「～ではないか」「～のだろうか」等、話者の判断を表わす表現である場合が多く、このグループのカ従属節は、「主体の判断領域」に関わる内容を表すものが多いと見ることができる。

しかし、引用表現には人の言葉や思考内容をそのまま伝達するという機能があり、この場合の引用節をカ従属節と見做すことができるのかどうか。残された問題として今後の課題としたい^{*13}。

3-6. A類2種の場合

A類2種は、主節に対して「独立文的」である。「カ従属節＋指示詞（＋N）＋助詞」という基本形を持ち、カ従属節の後に句点を打つことが可能である。

A類2種のカ従属節の内容がどのような概念領域に属しているかを見ると、A類1種同様、主体が事態をどう判断し、捉えているかという「主体の判断領域」に属する内容が観察される。

2-2-6 節および注7で述べたように、A類2種は主に指示詞を取り除くとA類1種a～dに変換できる。では、A類1種ではなくA類2種のカ従属節の方が使用されるのは、いかなる条件によるのだろうか。

A類2種のカ従属節と指示詞は、いわゆる「先行詞」と「照応詞」の関係にある。このように先行詞と照応詞が明示的に近接して使用されると、その先行詞がポイントとしてマークされ、強調されると考えられる。つまりA類2種のカ従属節は、話し手がそのポイントをより強調して伝えたいと意識する場合に選択される表現ではないか、と考えられる。このように考えると、A類2種のカ従属節は「主体の判断領域」に関わるのみならず、「主体の表現効果意識の領域」にも関わる表現である、とすることができる^{*14}。

以上のことから、カ従属節の性格として新たに次の点を付け加えることができる。

- (36) A類1種より独立文的な性格の強いA類2種のカ従属節は、「主体の判断領域」のみならず、「主体の表現効果意識の領域」にも関わる表現である。

*13 この問題について砂川(1988)に論考がある。

*14 益岡(1997)pp.82-84「従属節と文の概念レベル」で、「表現・伝達レベルの従属節」とされているものに相当すると思われる。前注10参照のこと。

3-7. A類3種の場合

A類3種のカ従属節は、新聞の見出しや対談場面で一般的な問いかけの文として使用されることが多い^{*15}。こうした一般的な問いかけの文が成立するためには、話し手が何をポイントと捉えているかということに加えて、「問いの受け手」が存在していることが必要である。見出しの場合は新聞の読者が、対談の場合は対談相手とともに対談を見る（読む）者が「問いの受け手」として想定できるだろう。

また、A類3種のカ従属節は、スポーツ実況での使用も頻繁に観察される。1998年冬季オリンピック長野大会ジャンプ団体戦のテレビ実況放送^{*16}の場合、A類3種のカ従属節の使用は、前掲の用例(28)のように、実況者が競技の過程を追いつながりその様子を視聴者に伝える場面で頻繁に観察された。^{*17}

また、競技中の実況以外の場面（例えば実況者と解説者が競技について話す場面等）ではA類3種のカ従属節の使用が少なく、使用された場合は、その時競技をする選手への期待を表明して声援を送る場合や、そうすることによって視聴者を競技に引き込もうとするような場合に限られていた。

- (37) <前にジャンプをした外国人選手がトップに立った。その次に日本選手がジャンプを行う場面で。>さあ、このイエックレを、イエックレを抜くことができるか、トップに立てるか、原田、風は向い風。(長野)

こうしたことから、A類3種のカ従属節は聞き手の存在を前提とした表現であり、話し手が聞き手への表現効果を意識した場合に使用される表現であると考えられる。A類3種のカ従属節も、前節A類2種(36)同様、「主体の判断領域」のみならず、「主体の表現効果意識の領域」にも関わる表現であると捉えることができる。

4. おわりに

以上の考察の結果から、カ従属節A類の基本的な性格は次のようにまとめられる。

まとめ1)

カ従属節A類1種、2種、3種の使用はいずれも、主体が事態の何をポイントと捉え、それをどう判断したかという「主体の判断領域」に関わっている。カ従属節A類が使用される背景には、事態に対する主体の判断、捉え方があり、これを表現しようとする際にカ従属節A類が使用される。

*15 益岡・田窪（1992）pp.135-140「疑問と否定の表現」

*16 民放。1998年2月17日放送。実況担当者はNHKのアナウンサー。

*17 長野五輪ジャンプ団体戦の実況で観察されたカ従属節A類29例中、A類3種は22例であった。この内、競技中にその様子を視聴者に伝えるための使用が17例、その他の場面で選手への期待を表明する等の使用が5例あった。

まとめ2)

主節に対してより独立文的な性格が強いカ従属節A類2種、3種は、「主体の判断領域」に関わるにとどまらず、発話の受け手を意識した「主体の表現効果意識の領域」にも関わる表現である。

こうしたカ従属節A類の性格は、カ従属節を含む文の使用場面に影響を与えるはずである。「はじめに」に挙げた用例(1)a(2)a(2)bの使用場面について、本稿の考察結果から考えられることを最後に述べておきたい。

(1)a. 授業が何時に終わるか、わかりますか。

これはいわゆる間接疑問文においてA類1種aのカ従属節が使われた例である。A類1種は「主体の判断領域」に関わる場合に使用されるのであるから、A類1種を含む用例(1)aは話し手にとって、「授業が終わる時間」が事態の何らかのポイントであると捉えられた場面で使用されるはずである。例えば、緊急に連絡が必要な学生がある授業に出席しているという状況で、その学生に連絡を取りたいと思っている人には「授業が終わる時間」が事態を進展させるためのポイントとして捉えられるだろう。この人がその学生の家族に電話で授業終了時間を聞く時に、用例(1)aが使用される可能性が一例として考えられる。

(2)a. 授業が何時に終わるか、時間割りを見て調べました。

b. 授業が何時に終わるか、学生ならだれでも知っています。

用例(2)は、a,bとも既に不明ではなくなった事柄がカ従属節A類1種aの内容となっている例である。用例(2)も用例(1)と同様、話し手によって、「授業が終わる時間」が事態の何らかのポイントと捉えられた場面で使用されるはずである。用例(2)aの使用場面を考えると、例えば、緊急に連絡が必要な学生がある授業に出席していて、その学生に連絡しようとした人が「できるだけ早くその学生に連絡したかったので、授業が何時に終わるか、時間割りを見て調べました。」と述べる、といった場面が考えられるだろう。

用例(2)bの使用場面については、例えば、「授業が終わったら会いましょう」と言っている留学生と会う約束をした人が、何時何分と時間をはっきり言った方がよかったかと心配しているという状況で、その事情を知った人が「授業が何時に終わるか、学生ならだれでも知っています。そんなこと心配しなくても、その留学生は会う時間がわかっていますよ。」と述べる、といった場面が考えられるだろう。以上、本稿での考察結果として得られたカ従属節A類の基本的性格から考えられる場面の一例を述べた。

本稿では、カ従属節がどのような表現なのかを考える基礎として、カ従属節の分類を行い、文中での役割や内容から、その基本的性格を考察した。次の段階としては、カ従属節が使われる場においてその使用を規定している条件は何かということについて、考察を進めたいと考えている。

【参考文献】

- 安達太郎 (1995) 「カ」による従属節の不確定性の表示について」仁田義雄編『複文の研究(上)』くろしお出版
- 砂川有理子 (1988) 「引用と話法」北原保雄編『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』明治書院
- 仁田義雄 (1995) 「日本語文法概説(複文・連文編)」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類意表現の文法(下)』くろしお出版
- 野田尚史 (1989) 「真正モダリティをもたない文」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 服部 匡 (1992) 「現代語における「へか」のある種の用法について」『徳島大学国語国文学』5
- 藤田保幸 (1983) 「従属句「へか(ドウカ)」の述語に対する関係構成」『日本語学』2-2
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- (1997) 『複文』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版』くろしお出版

【用例の出典】

- ・(朝日): 朝日新聞日曜版 1997年12月14日「地球食材の旅・ごちそうさま」
- ・(河童): 『河童が覗いた仕事師12人』平凡社
対談者: 妹尾河童(舞台美術家)／井上ひさし(作家)／篠山紀信(写真家)／蜷川幸雄(演出家)／三国清三(フランス料理、シェフ)／立花隆(評論家)／澤井信一郎(映画監督)／三宅一生(衣服デザイナー)／山下洋輔(ジャズピアニスト)
- ・(舛添): 『舛添要一の先見対談』テレビ東京編 フットワーク出版
対談者(肩書きは当時のもの): 舛添要一(国際政治学者)／橋本龍太郎(自民党党首)／細川護熙(日本新党代表)／原田永幸(アップルコンピュータマーケティング部長)／伊丹十三(映画監督)／柿沢弘治(外務政務次官)／和田一夫(ヤオハンインターナショナル代表)／細川護熙(日本新党代表)／筒井信隆(日本社会党)／松井孝典(地球物理学者)
- ・(長野): 1998年冬季オリンピック長野大会ジャンプ団体戦のテレビ実況放送から筆者が起こしたスク립ト(民放。1998年2月17日放送。)

